

文化施設が、まちを元気にする

- 可児市文化創造センター ala の取り組みから -

公益財団法人可児市文化芸術振興財団
可児市文化創造センター ala
創造事業課 松浦 正和

仙台 × 自分 GROUND → ART STANDARD.

GROUND



ART STANDARD.



可児市文化創造センター ala <https://kpac.or.jp>



可児市文化創造センター×東日本大震災

東日本大震災復興支援 祈りのコンサート2023

～被災地へ届け、私たちは忘れない～

東日本大震災被災者の心の復興に向けて「ア・ラ」としてできることは何かを考え、室内楽のコンサートを通して、地域の企業や市民の協力を得て、収益や寄付金を被災者支援団体へ寄付するプロジェクト。

【日時】 3/11 【会場】 aia 主劇場 【定員】 426人

【出演者】

ピアノ：田村 晋

ヴァイオリン：堀内豊太、堀内絵実梨

合唱：市民ミュージカル「君といた夏」出演者25人

ナビゲーター：佐野秀典

【協力】 8企業・団体（一覧はP63掲載）

【後援】 気仙地域福祉ボランティア「こもれびの会」

傾聴ボランティア「こころのもり」

雲古地域傾聴ボランティア「支え愛」

（公財）宮城県精神保健福祉協会みやぎ心のケアセンター

寄付金名計

314,536円

東日本大震災復興支援祈りのコンサート2023

アーラが広げる
被災者へ向けた
共感の輪

東日本大震災復興支援祈りのコンサートは、東日本大震災によって被災した地域や被災者への支援を目的としています。2011年の震災から12年が過ぎましたが、被災された方々のカウンセリング等の相談件数は今なお高止まりの状況にあり、高齢化やコミュニティ解体によるストレスの増加等、様々な要因が絡み合い問題は複雑化しています。時間がかかる心の復興のために、祈りのコンサートはその一助として、震災があった年から毎年アアラで開催されてい

コンサートの参加者が、被災地へ思いを寄せ自分の経験や感情を周りの人と分かち合い、開催目的に共感しコンサートの支援をしていただいている協賛団体も含め、広く人々が集まり、共に音楽を聴きながら交流することで、そこには共感の輪が生まれ、人と人が支え合う心の絆がつくられます。震災の記憶と被災地の教訓を次に伝える役割も担っており、今後発生するかもしれない南海トラフ地震への心の備えも含めて、地域の防災意識と道徳意識を高めることも意図しています。



被災地アウトリーチ

「こころのケア」のための 朗読と対話のプロジェクト

東日本大震災の被災者に、涙を流すことで心のバランスを取り戻してもらおうと、朗読劇「シリーズ窓文」を岩手・宮城の全11ヶ所にて開催しました。

7/31～8/5 出演：山本陽子・上田夢 巻数：全64巻 人
 <岩手>
 山田町、宮古市、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田町
 <宮城>
 黒川町、山元町、石巻市、七ヶ浜町
 各地域の避難所及び集会所等 全11ヶ所



30

[illegible]



文化芸術と人



劇場と人

ala ミッション

「芸術の殿堂」ではなく、
人々の思い出が詰まった「人間の家」

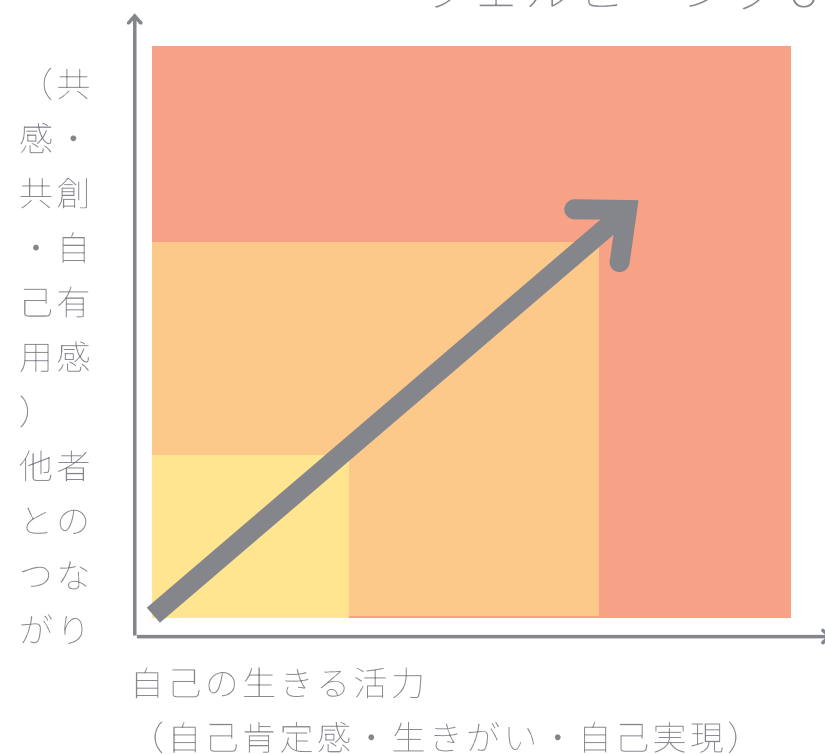
劇場は多様な価値観と出会う場であり、人と人とがつながる場。文化芸術を愛好する人たちだけでなく、あらゆる層の市民が生きがいを持ち、安心して集うことができるもう一つの我が家のような存在として、文化芸術で生きる活力とつながりを創出し、＜誰ひとり孤立させない社会＞を目指します。



**WE ARE ABOUT
PEOPLE
NOT ART**



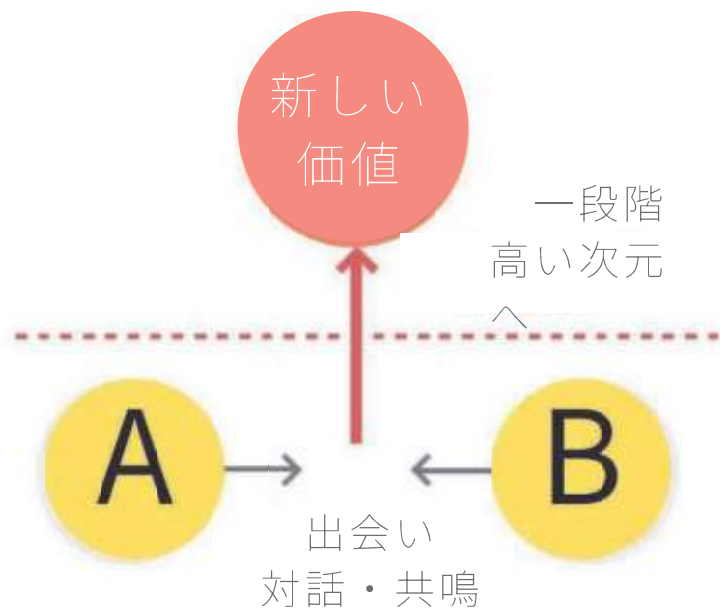
ごきげん
ウェルビーイングUP!



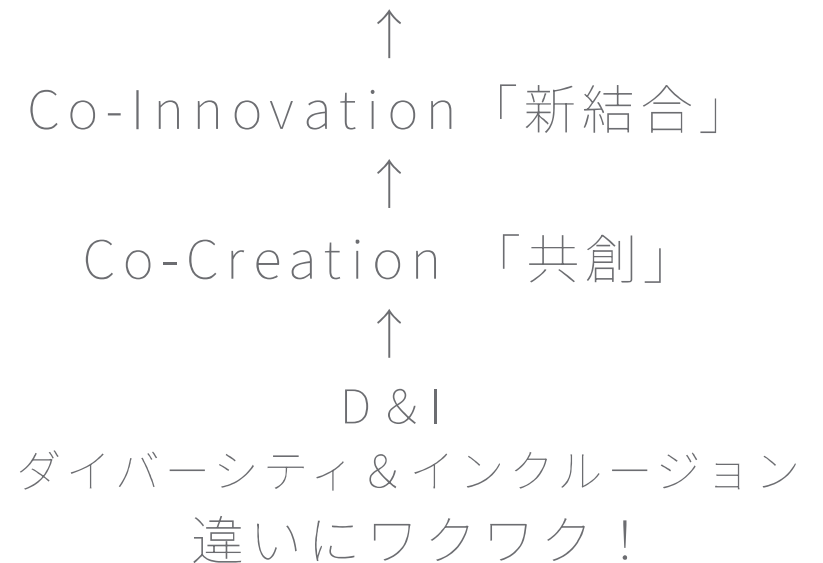
alaビジョン

DE&Iという土壌で、コ・クリエーションという種を蒔き、
コ・イノベーションという実を实らせることで、
社会全体のレジリエンスを高めていく」

すべての人が“違い”を価値として受容し、
自分らしく幸福に共生できる社会の実現



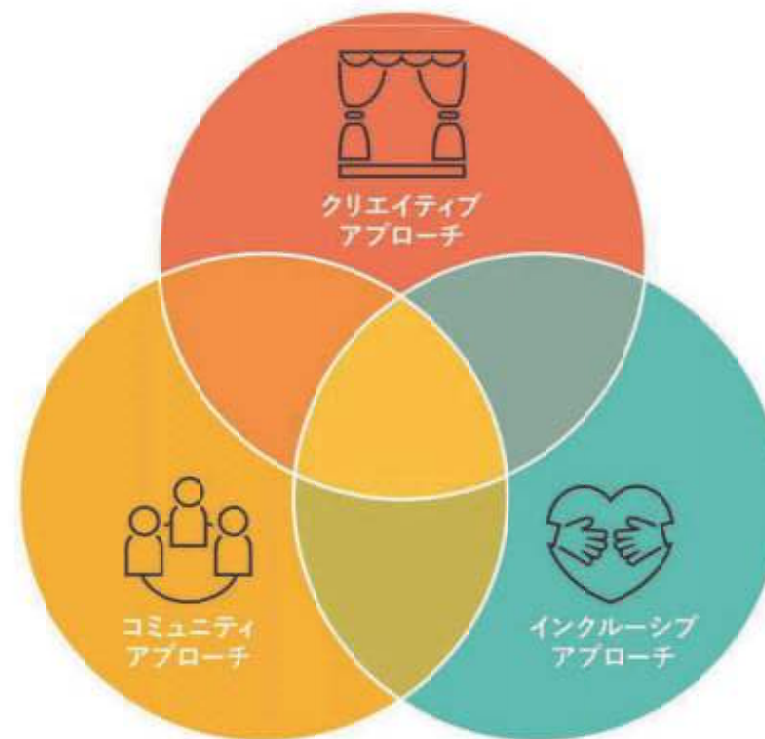
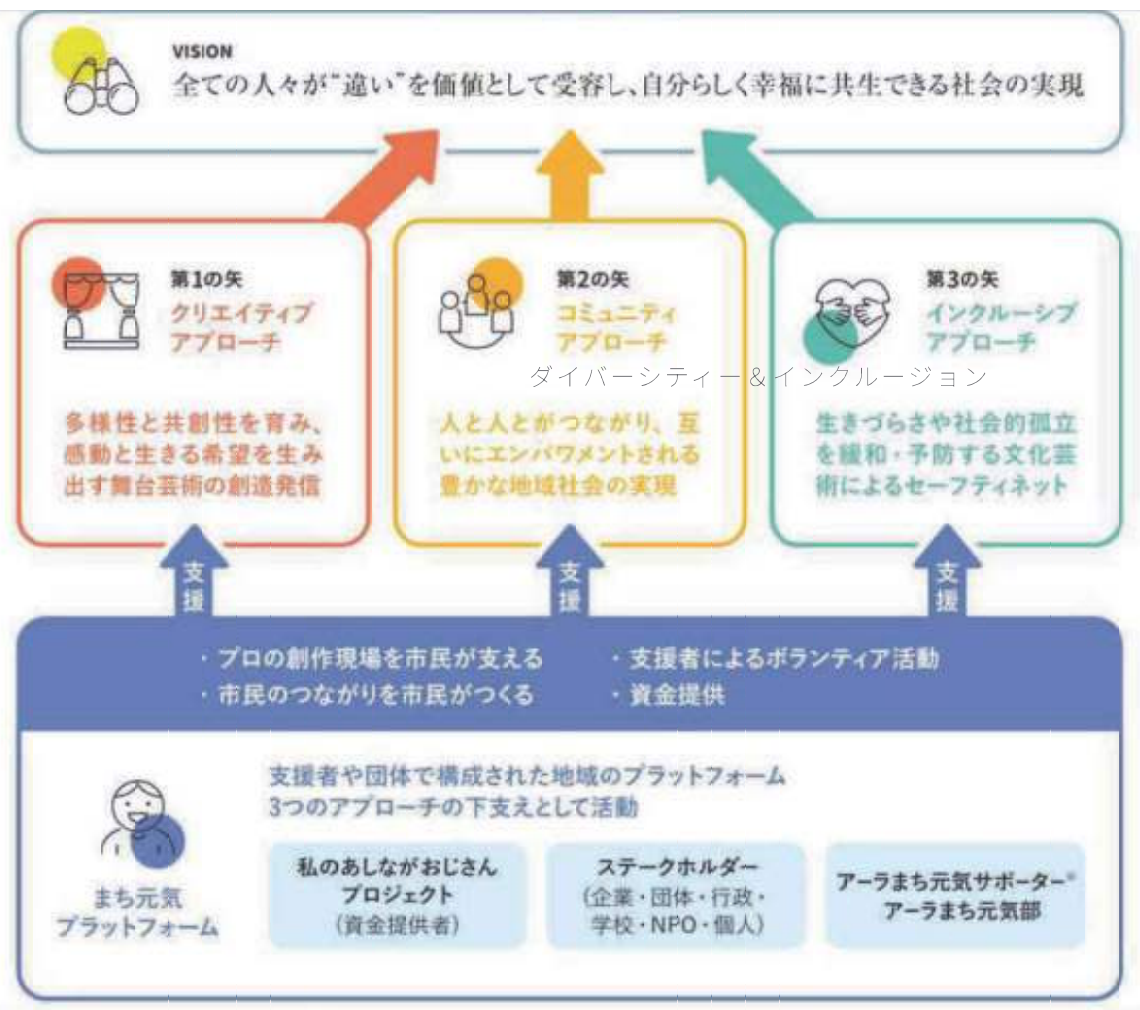
レジリエンス（回復・適応力）の高い社会へ



違いを対立項ではなく、異なる視点を価値として受容

ala戦術

DE & I × クリエイティブ！



alaまち元気プロジェクトの3つのアプローチ

社会課題

つながりの欠如による様々な病

現在の社会状況

地縁

地域コミュニティの
弱体化

人口減少、過疎化、町内会減少、
こども会縮小、担い手不足 など

血縁

家族内の
課題増加

シングルマザー、引きこもり、介護、
ネグレクト、DV など

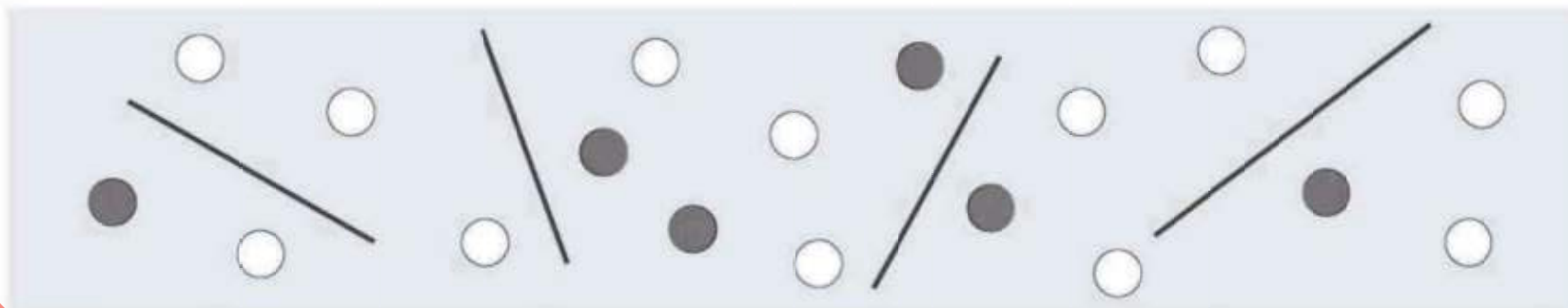
社縁

働き方の変化

所得格差、非正規雇用、働き方改革、
男女共同、終身雇用制度の廃止 など

& コロナ禍

● 活力のある人 ○ 活力の無い人 — 阻害要因



つながりを生む仕組みの衰退

従来の地縁に変わる【縁＝つながり】の仕組みが必要

ala戦略 文化芸術を活用した「つながりの処方箋」

（薬ではなく、まちのつながりが、私たちを元気にする。）



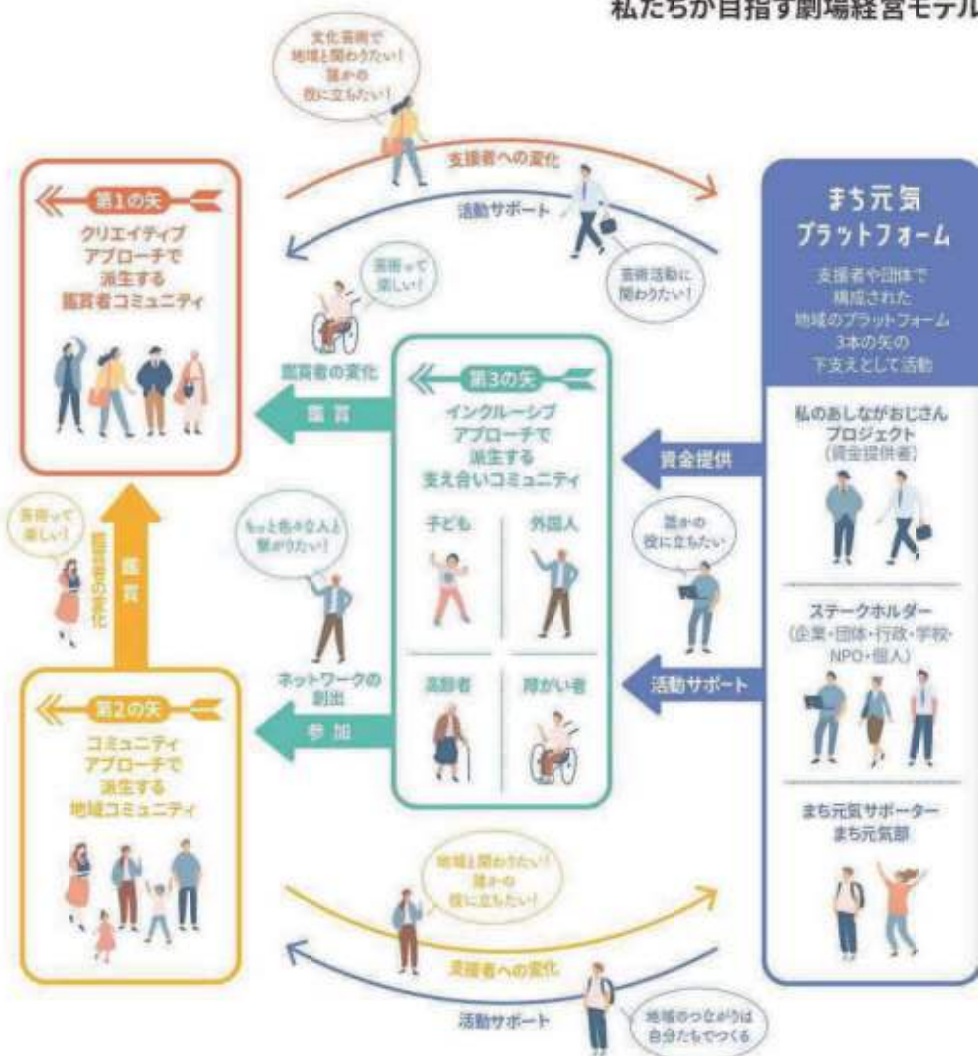
孤立社会から

「つながりの社会」へ

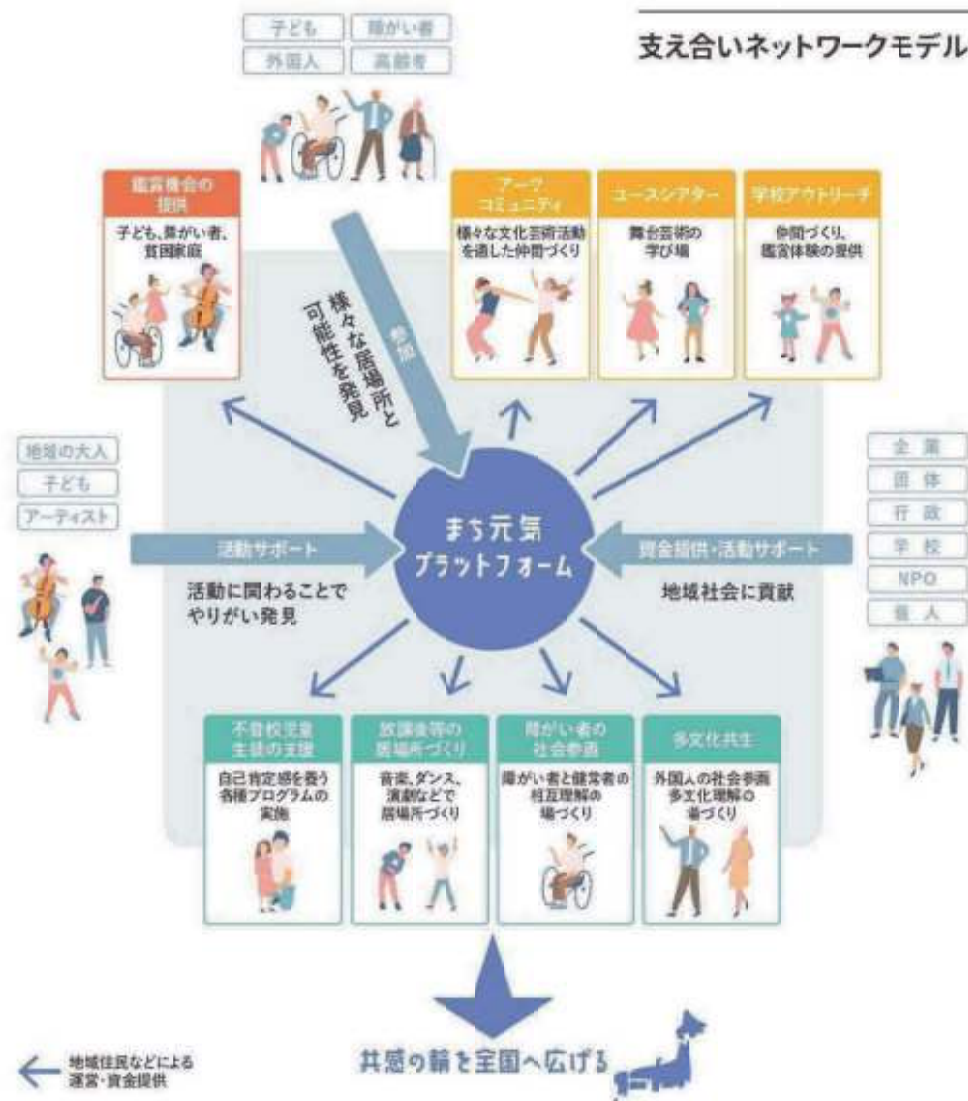
- ・医療の上流にある孤立を、まちの力で予防する。
- ・人間中心性・エンパワメント
- ・共創によるマッチング
- ・アアラをハブとし、誰もがリンクワーカーとなる地域へ。

行政、社会機関、学校、企業、アーティスト、市民団体など様々なステークホルダーと課題解決に向けた連携（つながりづくり）をしコレクティブ・インパクトをおこす。

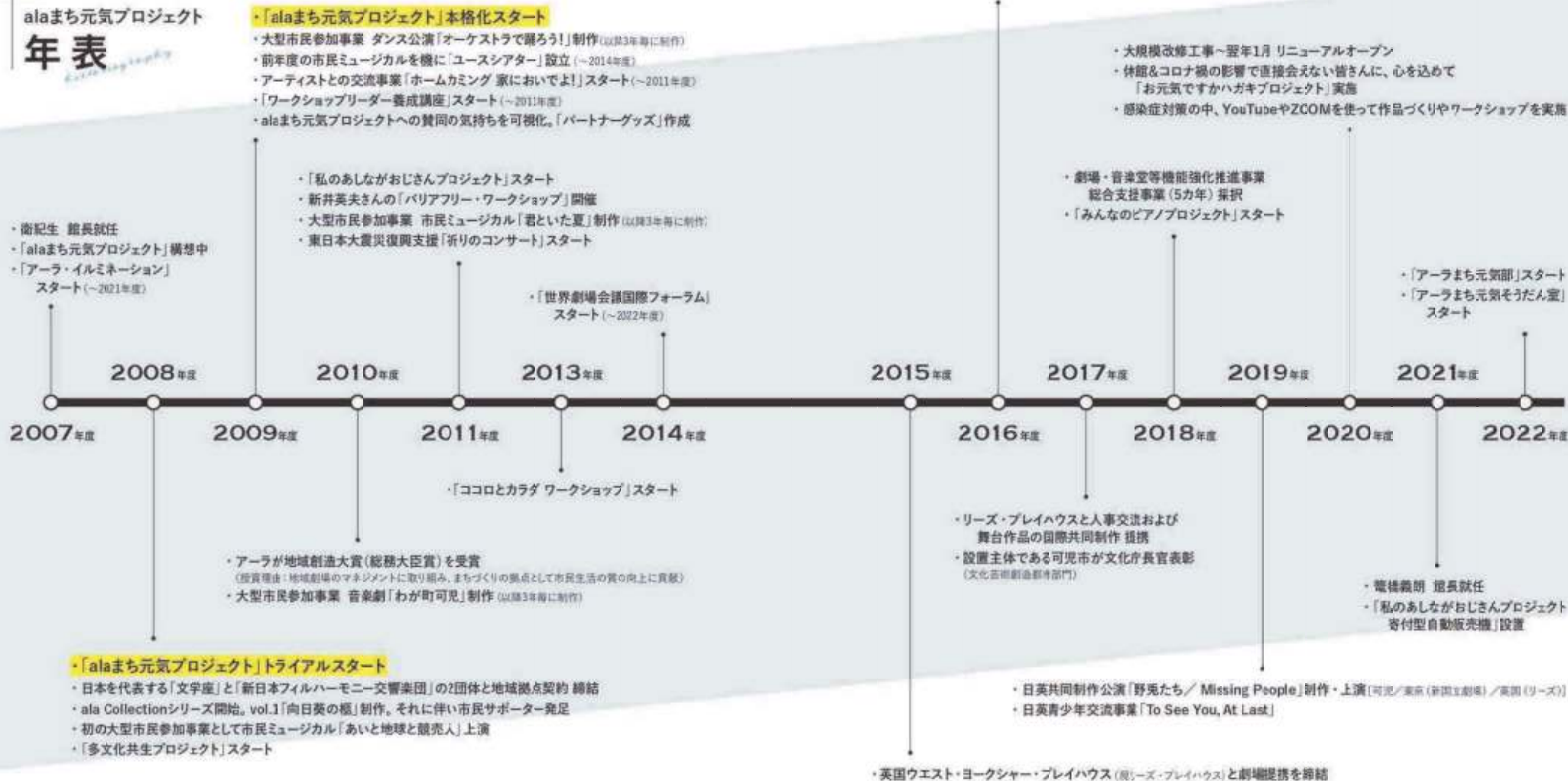
私たちが目指す劇場経営モデル



支え合いネットワークモデル



alaまち元気プロジェクト 年表



まち 元気

alaまち元気プロジェクトレポート

2009

KANI PUBLIC
ARTS CENTER *ala*

社会機関としてのアーラへ — 『ala まち元気プロジェクト』

可児市文化創造センター館長兼劇場総監督 衛 紀生

米国の地域劇場は人口のおよそ2%の市民が劇場に足を運び、同時にその2%の観客が寄付者となっています。その事業収入と寄付で劇場運営のおよそ90%前後を賄っています。一方、可児市文化創造センター(アーラ)のような日本の公共文化施設は、すべての市民から徴収した税金で成り立っています。つまり、日本の公共文化施設は、すべての市民を視野に入れたサービスを提供してイコール・アクセスを実現させる義務があるのです。一部の芸術愛好者のための施設であってはならないのです。

就任して2年目から「すべての市民を視野に入れた」、ワークショップ、アウトリーチを教育機関、福祉施設、病院、企業、多文化共生施設、市民宅に届ける『alaまち元気プロジェクト』(24プログラム/267回)を始めました。2010年度には300回に膨らませることになります。「芸術の殿堂から人間の家へ」を具体化するためのシフトチェンジです。愛好者のための単なる文化施設から「社会機関としてのアーラ」への第一歩を踏み出しました。

すべての市民に自己実現の機会を提供するオルタナティブ・アーラ(もうひとつのアーラ)としての活動が、この『alaまち元気プロジェクト』です。収益の見込めない、しかもアーティストと対象施設職員と担当職員がミッションを共有する手間のかかる仕事ですが、日本の公共文化施設の成立根拠に対応するモデルとなる『alaまち元気プロジェクト』であると確信しています。

目次

お届け編

学ぶ編

創る編

アーラが目指している「まち元気」とは？

× 「地域の賑わい」や「経済的な活性化」
「イベントの盛り上がり」など、目に見える活気

× 文化芸術の普及・振興、劇場への集客、
チケット収益拡大、流行りのアーティスト招聘

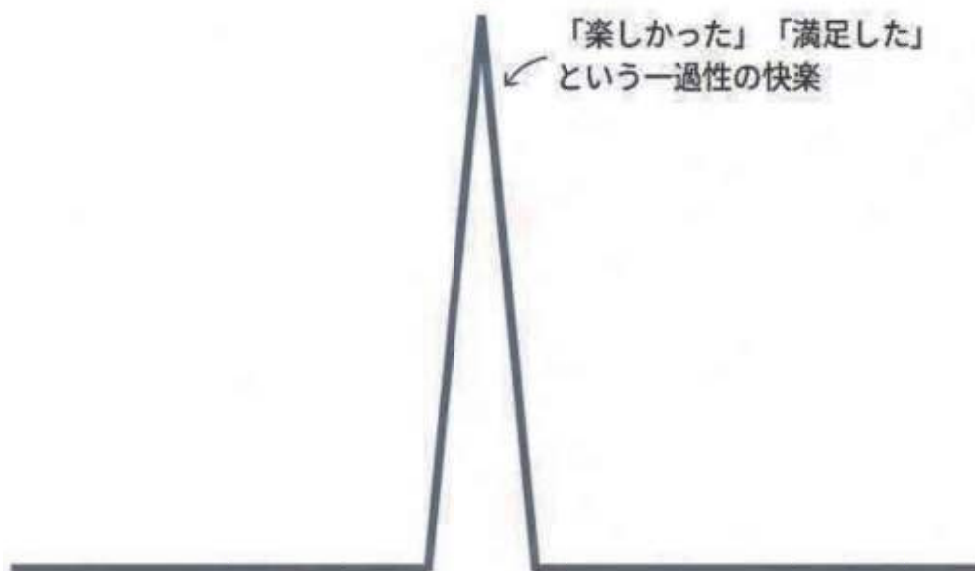
まち元気＝コミュニティエンパワメント

エンパワメントは、本来持っているその人の内発的な力を引き出し開花させることです。
地域に住む人が主役となり、対話とつながりを通じて自分たちの地域を良くしていくこと

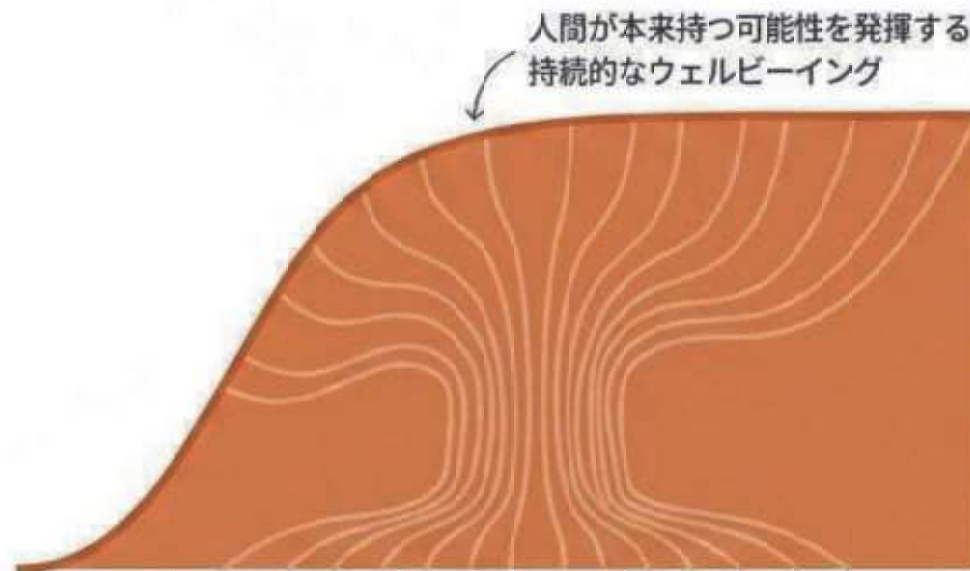
アートがもたらすのは、一過性の娯楽ではなく「人間的な開花」

公共劇場は、単に短期的なエンターテインメント（ヘドニア）を提供する施設ではありません。個人の持続的なウェルビーイング（ユーダイモニア）を高める「社会機関」であるべきです。

ヘドニア (Hedonia)



ユーダイモニア (Eudaimonia)



まち元気 プロジェクト

課題解決+
価値創造=
コレクティブイ
ンパクト

公共劇場×
社会課題×
共感のネット
ワーク



障がい×ディスコ

みんなのディスコ
全ての違いの垣根を
越えて音楽、ダンスで
ココロつながる空間



ダンス×音楽×多世代

大型市民参加事業
オーケストラで踊ろう！
コンテンポラリーダンスと
オーケストラのコラボ。
小学生から80代まで多様
な市民が舞台づくりで
つながり・絆を育む



多文化×演劇

多文化共生
プロジェクト

異なる文化や背景を
持つ人々が演劇・劇場
を通じてつながる



表現×教育

ココロとカラダWS
学校・不登校児童生徒
親子・高齢者
仲間づくりのコミュニ
ケーションWS

生きる活力とつながりの創出、孤独・孤立を防ぐ予防策として



まち元気 プラット フォーム

コレクティブ
インパクトを
引き起こす



ファシリテーター
ワークショップの進行
参加者の共鳴・共振を促す

クリエイティブ



私のあしながおじさん
プロジェクト
子どもへの取組みの
共感者・資金支援

プラットフォーム



まち元気リンクワーカー
人と人、人と場や活動を
結びつける地域の世話人

インクルーシブ



まち元気そうだん室
ラウンドテーブル
社会機関との情報共有
地域の相談機能

1. 共通のアジェンダ
生きる活力とつながりの創出
2. 共有される評価・測定
ロジックモデル・プロジェクトレポート
3. 相互に強化し合う取組
まち元気プロジェクト
4. 継続的なコミュニケーション
まち元気ラウンドテーブル
5. 取組を支える組織、人
まち元気リンクワーカー



まち元気部

中高生たちが地域の様
々な人と交流しながら
初めての体験に挑戦

コミュニティ

具体的な取組

～後半～

〇〇×文化芸術（劇場） = 課題解決×価値創造

社会包摂型・つながりの処方箋

【ライフステージ】 【ART】 【社会的課題】

【具体的なプログラム】

乳幼児×文化芸術×子育て

小学生×文化芸術×教育現場

文化芸術×障がい

文化芸術×多文化共生

高齢者×文化芸術×一人暮らし

多世代×文化芸術×地域

・・・親子de仲間づくりWS

・・・学校ワークショップ

・・・みんなのディスコ

・・・多文化共生プロジェクト

・・・ココロとカラダの健康ひろば

・・・大型市民参加事業

【ご自身の関心ごと・フィールド】と文化芸術をかけあわせたら？

新たな文化芸術の価値が生まれる



「親子de仲間づくりワークショップ」は、核家族が常態化するなか小さい子どもを抱える皆さんが自宅で孤独に陥ることのないよう「親子de仲間づくり」のできる場として2013年に始まりました。参加者は、10年間で延べ5,726人になります。（※2020年はオンライン交流のみ）

0～3才児と保護者の方を対象にアーラが主催する特設として、アーティストが講師を務める点が挙げられます。演劇やダンスの表現手法を用いて、布や新聞紙といった身近な材料や楽器と共に展開されるプログラムは、子ども達の好奇心がそえられるポイントが散りばめられています。また遊びながら他者と関わり合う内容であるので、いつの間にか参加者同士の距離が縮まっていきます。

親子de仲間づくり ワークショップ

乳幼児と保護者が孤立することを防ぐことを目的に、コミュニケーション・ワークショップを通じて、想像力や感受性を育みながら、親子で仲間づくり。

日程 4月～7月、10月～12月
回数 12回
会場 ala レセプションホール ほか
定員 555人
講師 新井英夫チーム（演劇家、ダンスアーティスト）
Ten seeds（劇・音楽・表現活動）

そしてワークショップが終わってからも自由に過ごせるよう会場を開放しているので、引き続き興味の湧いたもので遊んだり一緒に昼食をとったり、清々しい天候の日には外の水と緑の広場へ赴きピクニック気分でお喋りしたりと、ワークショップに参加することを起点に、保護者の皆さんが気持ちをリフレッシュしたり情報交換したりできる時間となっています。全日程終了後の参加者アンケートでも、「育児のプレッシャーやストレスを軽減できましたか？」の質問に、毎回100%に近い皆さんが「とてもできた」「少しできた」と回答しています。

親子でワクワク、
みんなでニコニコつながって
気持ちもリフレッシュ



10:20 OPEN

10:45 自由あそび

11:00 お片付け

11:05 歌を交えてご挨拶

11:10 わらべ歌で手遊び

11:15 絵本読み

11:20 仲間集め
(寿司ネタ、させたい習い事)

11:25 絵本読み

11:30 ビニールふわふわ
・トンネル

11:45 歌、体動かしながら

その後、自由に交流
お弁当タイム

親10人、・子10人

「児童生徒のためのココロとカラダWS」アフタフ・バーバン事例

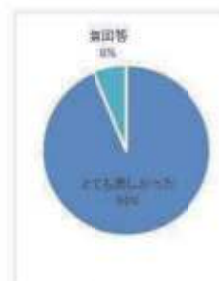






Q1. ワークショップに参加して楽しかったですか？

1	とても楽しかった	30	93.8%
2	楽しかった	0	0.0%
3	普通	0	0.0%
4	楽しくなかった	0	0.0%
5	無回答	2	6.3%
合計		32	100.0%



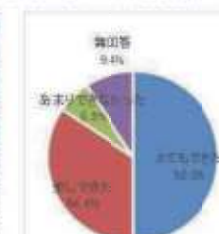
Q2. 仲良くなれた（はじめて話せた）友だちはいましたか？

1	たくさんいた	13	40.6%
2	少しいた	9	28.1%
3	いなかった	2	6.3%
4	もともと全員と仲良し	6	18.8%
5	無回答	2	6.3%
合計		32	100.0%



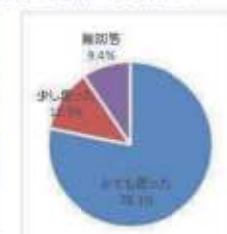
Q3. 自分の考えと表現や意見を、友だちに伝えることができましたか？

1	とてもできた	16	50.0%
2	少しできた	11	34.4%
3	あまりできなかった	2	6.3%
4	無回答	3	9.4%
合計		32	100.0%



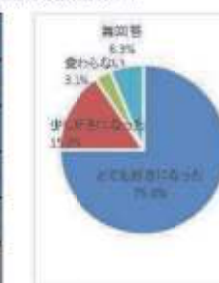
Q4. 友だちの表現や意見は おもしろいと思いましたか？

1	とても思った	25	78.1%
2	少し思った	4	12.5%
3	思わなかった	0	0.0%
4	無回答	3	9.4%
合計		32	100.0%



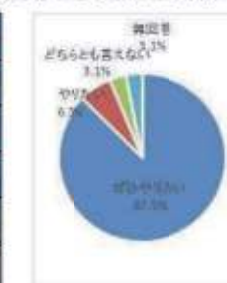
Q5. 自分のクラスが もっと好きになりましたか？

1	とても好きになった	24	75.0%
2	少し好きになった	5	15.6%
3	変わらない	1	3.1%
4	嫌いになった	0	0.0%
5	無回答	2	6.3%
合計		32	100.0%



Q6. また今回のようなワークショップをやってみたいですか？

1	ぜひやりたい	28	87.5%
2	やりたい	2	6.3%
3	どちらとも言えない	1	3.1%
4	やりたくない	0	0.0%
5	無回答	1	3.1%
合計		32	100.0%



ココロとカラダの健康ひろば

60代以上を対象としたコミュニケーション・ワークショップ。継続的な参加によって、楽しみながら健康維持と新たなコミュニティづくり。

日程 4月～7月、10月～12月
開催回数 20回
会場 ala レセプションホール ほかに232人
開催者 新井英夫チーム
(体育家、ダンスアーティスト)
Ten seeds (劇・あそび・表現活動)

「ココロとカラダの健康ひろば」は、高齢者の孤独防止、仲間づくりや生きがい発見の場として2013年に始まりました。運動機能の維持・向上を促すことで閉じこもりの予防に、また日常生活での不安や愚痴を聞き合える仲間づくりも孤立防止に繋がります。参加者は、10年間で延べ2,427人になります。〔※2020年・21年は対面・オンライン並行〕アーティストが講師を務め、参加者は各々のペースで無理のない範囲で体を動かし、想像力や創造力を刺激する知的活動で、ココロとカラダが開放されていきます。気がつくともるで昔からの友人のような関係性が築かれ、ワークショップ終了後の「お茶のみタイム」では、楽しい話題から抱えている悩みの話まで飛び交います。コロナ禍で活動が制限された2020年・21年は、通信環境が整っている方はご自宅から、ない方でもオンラインWSに参加できる

ようサテライト会場を設け、繋がりが途絶えてしまわないよう心掛けました。画面越しに互いの体調を気遣い、近況を伝え合い、固まった体を解す体操や発想力が試されるジェスチャーなどを通して、明るい笑い声が重なり合い、まさに「支え合い」の関係となっていました。全日程で対面での活動が実現できた2022年は、「自分たちが楽しむだけでなく、他の誰かにお届けしよう」と、野菜の苗をプランターに植え、不登校児童生徒のための教室へプレゼントしたり、親子WSの皆さんに収容体験をしてもらったり、世代を超えた交流もできました。小さなステップではありますが、同じ地域に住む同士の接点として、地域の「支え合い」のきっかけのための他者への気づきとして、これからも参加者の皆さんと知恵を出し合ってよりよい空間をつくっていききたいと思います。

ココロが晴れになる空間



多文化共生プロジェクト2022「BORDER」

外国籍市民の割合が約8%の可見市において、文化芸術を介したつながりで、異なる文化や背景を持つ人々が交流し、多様性を尊重し、それを豊かさとして受け入れ、より寛容な社会を築くプロジェクト。



作品一覧

2008年	『East Gate』	
2009年	『危き一髪』	
2010年	『夏の夜の夢』	構成・演出：田望寿見子
2011年	『最後の写真』	
2012年	『顔／ペルソナ』	
2013年	『ねこネコだいぼうけん』	
2014年	『星くす降る夜のだいぼうけん』	
2015年	『むかし昔のそのむかし』	作・演出：森さゆ里
2016年	『ミツバチぶんぶんハチミツぶん』	
2017年	『えんげき工作アトラクション』	
2018年	『ある夜、あるBarにて』	
2019年	『にぎやかなお葬式』	
2020年	『Trabaho～ある、わたしの人生～』	作・演出：鹿目由紀
2021年	『こころの井戸』	
2022年	『BORDER』	

日程 稽古：6/25～8/13(計14回)
 公演：8/14(計2回)
 アウトリーチ：2/11
会場 ala演劇ロフト、土田地区センター
定員 91人
出演者 17人(延べ206人) アウトリーチ：20人
脚本・演出 鹿目由紀 演出補助：カズ祥
協力 住吉エリオ洋一、山田久子
協力 NPO法人可見市国際交流協会
 可見市土田自治連合会





<https://youtu.be/xMGsMYcXhJE?si=PZLqVLpFsLC9YEiG&t=64>



開催 6/18
 会場 ala 演劇ロフト・美術ロフト
 参加者 54人、みんなのディスコサポーター 10人
 MC: うたのギリギリおにいさん(118歳)
 ドラムサークルファシリテーター: 中村陽子
 DJ: AKIRA, KZY, KYORO

「障がいのある方って、社会的な環境からどうしても施設や自宅に引きこもった生活になってしまっていて、公共の場でみんなと何かを一緒に楽しむ経験がほとんどないんです」

ある障がい者施設の職員さんの言葉です。「障がいのある方も誰もが一緒に楽しめる企画がやりたい、いや、公共施設で働き、文化芸術というものに携わっている自分たちがやるべき事でもあるんだ」そんな思いから、誰もが思い思いに楽しむことができる「音楽」と「ダンス」の空間『みんなのディスコ』は2016年に誕生しました。手探りながらも企画に賛同し協力してくれるDJ、ミュージシャン、ダンサーそして市民サポーターが集まり、皆のアイデアを持ち寄って毎年趣向を凝らした手作りのディスコ会場が生まれます。ディスコ絶対条件

のミラーボールを中心に掲げ、「七夕」や「ハロウィン」をテーマにしたり、「恥ずかしい」という人のために仮装グッズやフェイスペイントを設置したり、コロナ禍ではオンラインでのファッションショーまで開催しました。大音量のリズムに身を任せているうちに気持ちが開放されて、誰もが「自分は自分のままでいいんだ」と踊り弾けます。その日一日アールはまちの「ディスコ」に変身します。『みんなのディスコ』にはこれまで累計700人近い方が参加しています。出会いから地域が育める課題に気づき、皆の知恵と力を合わせて誰もが楽しめる場をつくり上げ、そして一緒に楽しみ合う。劇場のよう施設というハード、そして協力者というソフトはまだまだいろんな活用法を秘めています。



りゅうさん
 障がい者 30代→40代後半

- ・2010「多文化共生プロジェクト」チラシと一緒に配りに
- ・2025「みんなのディスコ」に参加

近づくとも電話が頻繁になる
 まち元気EXPOで念願の展示も！
 最近はどうの営業に来る

障がいのあるなし関係なく
 思い切り音楽を楽しむ機会

大型市民参加プロジェクト

alaでは2008年度より毎年 大型市民参加プロジェクトを実施しております。これは3年毎に、ミュージカル、翌年はコンテンポラリーダンス、翌々年は演劇という流れをとっております。本プロジェクトには、毎回100名程の市民が参加しております。制作過程において多くの市民が関わり創りあげていくことで、

参加者同士の絆を育み、地域への愛着を深めていただくことを目的としております。

また、プロのスタッフ・キャストの方々と共同・共演することにより、**市民の創作意識を高め、地域の活性化**を図っていきます。



2008年度「あいと地球と競売人」



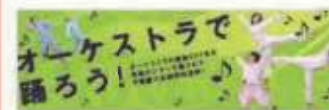
2011年度「君といた夏」



2014年度「君といた夏 エクストラバイニー可児」



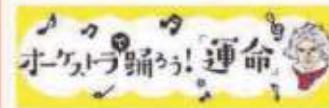
2017年度「君といた夏 スクランバイニー可児」



2009年度「オーケストラで踊ろう!」



2012年度「オーケストラで踊ろう! 新世界」



2015年度「オーケストラで踊ろう! 運命」



「オーケストラで踊ろう」



2010年度「わが町可児」



2013年度「MY TOWN 可児の物語」



2016年度「MY TOWN 可児」